

長野県の埋蔵文化財情報誌



山鳥場遺跡出土 耳飾

信州の遺跡

第14号

最新報告書から1

千曲川に臨む縄文時代中期・後期の集落跡

栄村 ひんご遺跡

ひんご遺跡は新潟県境まで約5kmの、千曲川^{ちくまがわ}左岸の河岸段丘に広がる。縄文時代中期後半から後期前半の竪穴建物跡^{たてあな} 23軒、長野県域に多い敷石^{しきいし}住居跡7軒、新潟県域で一般的な掘立柱建物^{ほったてばしら}6棟などの遺構が見つかった。

縄文土器は、中期は火焰型・王冠型土器、沖ノ原式など新潟県の土器が主体である。後期には長野県の特徴をもつ土器が優勢となり、白色・軽量の独特の土器がある。貝輪形土製品、サメ歯製装身具^{さんかくとう}、三角壙形石製品、アスファルト塊など希少な遺物もある。種実ではトチノキとオニグルミが多く、動物骨ではイノシシのほか、サケ科、コイ科も検出した。

信越交流を物語る、県境地域の特徴が現れた集落の生活状況が明らかになった。(綿田 弘実) (『ひんご遺跡』長野県埋蔵文化財センター 2018)



縄文時代中期中葉の土器
(中央奥 現存高 51cm)



縄文時代後期前葉の敷石住居跡
(検出部分長さ 7.84m)



縄文時代後期前葉の敷石住居跡



縄文時代後期前葉の土器
(後列右から2番目 現存高 40.8cm)

慶長期の金山関連遺跡！

川上村 梓久保金山遺跡

梓久保金山遺跡は、川上村の金山開発に関する調査を目的として川上村文化財保護委員会と発掘調査を行い、鉱山関連の白類とともに金粒が付着した陶器片などが出土した。

川上村では、戦国期の武田氏により金山の開発がなされたとの伝承もあるが、今回の調査地点は慶長期ごろに行われた金の精錬の場であることが判明した。

県内では、これまで金山関連遺跡の発掘調査はほとんどなく、戦国期から江戸初期の金山開発に関わる貴重な資料群を検出している。

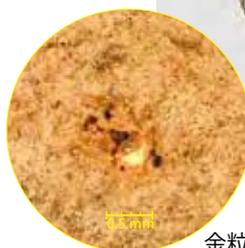
(川上村教育委員会 長崎 治) (『梓久保金山遺跡発掘調査報告書』川上村教育委員会 2019)



※写真提供：川上村教育委員会



金粒等の付着がみられる陶器片



金粒付着の拡大
0.5 mmほどの金粒が付着する

(分析・撮影：国立科学博物館 沓名真彦)



金鉱石粉碎用の挽き臼 (下臼)



金鉱石粉碎用の磨き臼

縄文時代の土器から種実圧痕を発見！

朝日村 山鳥場遺跡

山鳥場遺跡は鎖川右岸の河岸段丘上に立地する。縄文時代中期後葉の竪穴建物跡 14 軒を調査。建物跡の床面では土器片を敷き詰めた炉や埋甕を検出した。土器の種実圧痕ではエゴマ・ダイズ属・ササゲ属アズキ亜属を同定した。特に 7 号竪穴建物跡から出土した 1 点の土器からはエゴマと推測される種実圧痕を 881 点確認した。

同定された種実 3 種類は中部高地における土器圧痕に確認例が多く、長野県における縄文時代の植物利用を考える上で重要な発見となった。(廣田 和穂) (『山鳥場遺跡』長野県埋蔵文化財センター 2019)



遺物出土状況 (点線内エゴマが大量に含まれる土器)



14号竪穴建物跡土器敷炉

縄文時代後期から晩期の拠点的な集落 松本市 エリ穴遺跡

エリ穴遺跡は松本盆地の東縁にあり、扇状地の斜面に立地する。縄文時代後期後葉から晩期中葉にかけて途絶えることなく営まれた稀有な集落である。

平成7年の発掘調査では、全国最多2,643点の土製耳飾や人面付土版などが出土し、居住域と祭祀場が一体化した集落のあり方やその変遷、居住域と廃棄場の分離、土製耳飾の系統と変遷などが判明した。

甲信地域では、後期後葉から晩期中葉にかけ集落・人口の著しい減少が進む。エリ穴遺跡は、甲信地域のこの時期の文化が、日本列島の他地域との交流の上に成立したことを示しており、当時の儀礼や交易及び社会の結びつきを究明する上で貴重であり、学術的な価値は非常に高い。（松本市教育委員会 三村 竜一）

（『エリ穴遺跡』遺構編1・2、遺物編1・2 2017～2019）



※写真提供：松本市教育委員会



土製耳飾



上：居住域と廃棄場（航空写真）
左下：人面付土版 右下：顔面分銅形土偶

最新調査成果から 1

昭和5年以來の調査！小諸市 国史跡 寺ノ浦石器時代住居跡



石囲炉と敷石



敷石下の埋甕



※写真提供：小諸市教育委員会

三方ヶ峰の山裾に位置する縄文時代の集落遺跡で、同じく国史跡の縄文集落跡である戌立石器時代住居跡（東御市）と谷を挟んで対峙する。

今回は昭和5年以來2回目の確認調査であり、縄文中期後葉から後期の住居跡や土坑、多数の縄文土器、石器、石皿、多孔石、土偶の胴部資料を発見した。住居跡の中には敷石住居もあり、加曾利E3式期より現れて馬蹄形集落を形成する様子が見えてきている。

調査成果については今後検証を進め、史跡整備に活かしていく計画である。（小諸市教育委員会 高橋 陽一）



住居埋土からの遺物出土状況

最新調査成果から 2

古代の瓦が大量出土！ 安曇野市 明科遺跡群 明科廃寺

明科遺跡群明科廃寺は、犀川右岸の河岸段丘上に所在する古代寺院跡で、昭和28年からこれまでに5次の調査が行われている。平成30年度に安曇野市教育委員会が実施した第5次発掘調査では、約40㎡の調査範囲からコンテナ約150箱の遺物が出土した。出土遺物には、軒丸瓦130点以上、軒平瓦50点以上のほか、道具瓦、瓦塔、土器類がある。

今後、遺物整理を行う中で、出土瓦の分析を通じて明科廃寺の盛衰の謎に迫ることを期待している。（安曇野市教育委員会 土屋 和章）



※写真提供：安曇野市教育委員会



発掘調査の様子（北から）



上：大量の古代瓦
左上：発掘調査の様子（北西から）
左下：古代瓦の出土状況



長野県埋蔵文化財センターでは、主にリニア中央新幹線建設事業及び関連事業に伴う発掘調査の拡大が予想されるため、平成31年4月、飯田市に飯田支所を開設しました。

飯田支所は、中央自動車道飯田インターチェンジから車で5分ほどの、飯田市^{きたがた}北方にあります。施設は飯田市から旧「北方寮」という母子寮を借用し利用しています。

今年度飯田支所では、リニア中央新幹線関連事業のほかに、辰野町、下諏訪町など、諏訪や伊那谷地域の発掘調査も担当しています。

当センターにおいて、他所に事務所を構えるのは、平成10年3月に上田調査事務所を閉所してから21年ぶりとなります。現在のところ、職員3名が常駐していますが、今後は業務の増加に伴い、さらに職員も増員する予定です。

開設されたばかりの支所ですが、ご支援、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

(飯田支所長 岡村 秀雄)



長野県埋蔵文化財センター飯田支所

〒395-0151

長野県飯田市北方 297-5

TEL 0265-49-0736 FAX 0265-49-0731



よろしくお願ひします!



埋文キーワード

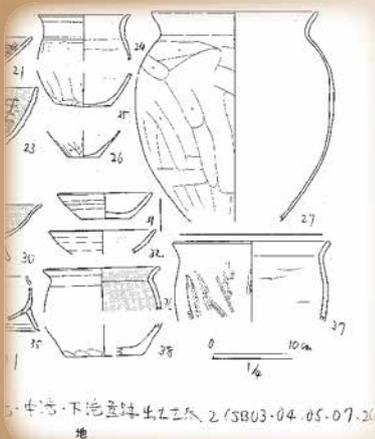
～図版組～



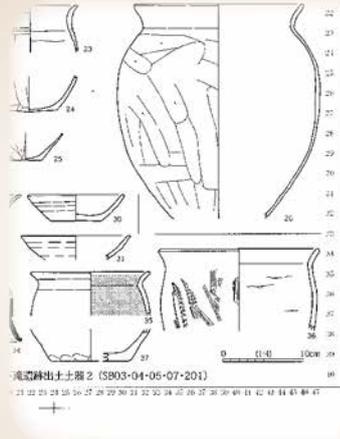
前号の「トレース」作業で清書した個々の遺構・遺物図をレイアウトして1つの図版にし、さらに本文や表と組み合わせて、1枚のページにする作業が「版組」である。

以前は図版を作るのに、トレース図を実物のページの2～3倍の大きさの厚手の台紙に糊で貼っていた。図を汚さないようにきれいに並べて貼るのが難しく、台紙も重くて持ち運びが大変だった。現在は、こうした作業をパソコン上で行えるようになり、運搬もデータだけなので、大変楽になった。

ただ、パソコン上での作業が感覚的に難しい人も少なからずいて、台紙にコピーを貼って見本を作ってから、デジタル化することもある。（上田 真）



手貼りのレイアウト見本



デジタル編集した遺物図版



パソコンでの版組作業

埋文本棚



『文化進化論』
アレックス・メスーディ著
野中香方子訳
2016NTT出版



『文化進化の考古学』
中尾央・松木武彦・三中信宏編著
2017 勁草書房

考古学は遺跡、遺構、遺物を研究することにより、過去の文化を復元する学問である。文化は地域ごとに多様性に富み、時代ごとに変化していく。

今回紹介する2冊は、この文化の多様性と変化していく様を、「進化」を用いて説明しようとする意欲作である。

考古学を学ぶものにとっての「進化」という言葉は誤解を受けやすく、一部の考古学研究者からは野蛮から未開を経て文明に至るといった発展段階論と結び付けられることもあった。

本書を読めばこうした考え方自体が、そもそも「進化」に即したものではなかったことが分かる。そして、人から人へと伝達されていく文化を説明するために「進化」という考え方が有効であり、遺跡、遺構、遺物の形態がなぜ時代と共に変化していくのかを理解する一助となる。（村井大海）



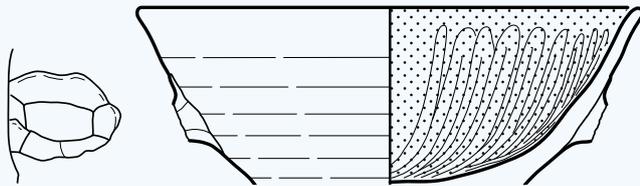
珍しきもの

双耳杯

長野市 小島・柳原遺跡群出土

双耳杯は、杯の外面2か所に把手を備えたうつわである。小島・柳原遺跡群では、平安時代の竪穴建物跡から出土した。内面にミガキ調整が施された破片で、口縁から底部にかけ全体の半分ほどが残存しているが、把手部分は欠損している。

長野県内では長野市^{あがたまち}県町遺跡、飯綱町^{おもてまち}表町遺跡、松本市^{しもかん}下神遺跡、佐久市^{ひじりほら}聖原遺跡などで確認されている。用途は不明ながら東北や関東地方では^{かんが}官衙や寺院関連遺跡でみつかることが多いため、これらの場所で使用されたものと推察されている。（寺内 貴美子）



小島・柳原遺跡群出土 双耳杯

イベント情報!

長野県立歴史館 開館 25 周年記念

特別企画 『土偶展』

本県では、国宝5箇のうち2箇（茅野市）をはじめ多くの土偶が出土しており、信州縄文文化を象徴する遺物といえます。開館25周年を迎える県立歴史館では、この土偶に焦点をあてた特別企画展を2期に分けて開催します。

「国宝土偶」展では、国宝土偶5箇が一堂に会します。至高の造形力を堪能し、強烈な個性を見比べてください。一方、長野・山梨には、一つ一つ大きさや表情の異なる土偶が数多くあります。「中部高地の土偶」展では、各地の縄文人の暮らしに寄り添った小さな女神たちに焦点をあてます。ご期待ください。

★「国宝土偶～縄文文化の多様な個性～」
令和元年10月26日（土）～11月10日（日）
期間中無休

★「中部高地の土偶～暮らしに寄り添う小さな女神～」
令和元年11月23日（土）～令和2年2月2日（日）
休館：月曜（祝日の場合翌日）、12月29日～1月3日



国宝土偶

（前列左より^{なかつぼら}中ッ原遺跡、^{かざはり}風張1遺跡、^{たなぼたけ}棚畑遺跡、^{ちよぼないの}著保内野遺跡、^{にしのみえ}西ノ前遺跡）

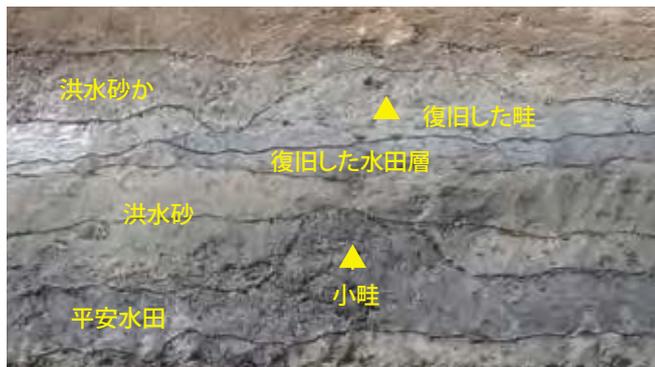
考古学の窓

また一つの時代が終わり、新たな時代が始まった。過ぎ去りし「平成」は「大災害」に象徴される時代であったという指摘がある。平成3年の雲仙岳噴火に始まり、気象庁が命名した災害は30件にのぼるといふ。県内でも「長野県北部地震」や「御嶽山噴火」など痛ましい災害が続いた。災害列島とも称される日本に暮らす人びとは、平成時代に限らず、地震、噴火、洪水などの災いを背負ってきた。

長野県埋蔵文化財センターは、信濃町西岡A遺跡で、断層に破壊された縄文時代の陥し穴を調査した。千曲市窪河原遺跡では1847（弘化4）年におきた善光寺地震の噴砂、軽井沢町県遺跡では古墳前期の竪穴建物跡の凹みに積もった1108（天仁元）年の浅間山降下火山灰など、県内各地の遺跡に残された地震や噴火の歴史を見てきた。



平安水田の畦を探った痕跡



洪水に埋もれた後、平安水田とほぼ同じ位置に復旧した畦

千曲川沿岸の千曲市力石や屋代、長野市塩崎や川田には、粘土質の土壌と砂がミルフィーユのように重なり、深さ5m以上に達する地層がある。今年度の調査で、長野市塩崎の石川条里遺跡では888（仁和4）年の洪水砂に覆われた水田の畦の位置を確かめる穴の跡が見つかった。畦は滞水させるため必要であるとともに、耕作地の境界を示す区画でもある。被災した人びとは、洪水前の畦の位置を確認し、ほぼ同じ位置に新たな畦を設けて水田を復旧したらしい。石川条里の地層には、約2千年前の弥生時代から中世にわたる水害と復旧の歴史が、幾重にも織り込まれている。

令和時代になっても、災害列島に暮らす私たちは、地震や噴火、水害から目を背けるわけにはいかない。将来の安全確保に向けて、考古学は、大地に刻まれた災害と復旧の痕跡を探り出し、記録に残して周知する役割を担っている。（平林 彰）

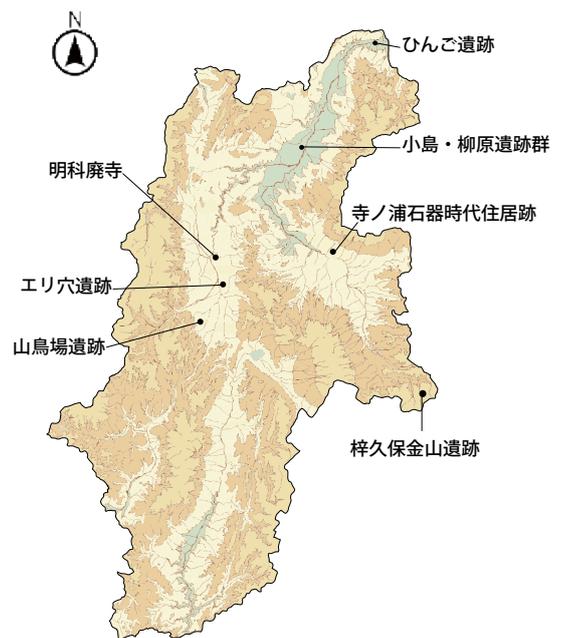
令和時代になっても、災害列島に暮らす私たちは、地震や噴火、水害から目を背けるわけにはいかない。将来の安全確保に向けて、考古学は、大地に刻まれた災害と復旧の痕跡を探り出し、記録に残して周知する役割を担っている。（平林 彰）

編集後記

今回掲載した遺跡は、縄文時代4遺跡、平安時代1遺跡、戦国・江戸時代1遺跡と縄文時代のものが多くなった。このように「縄文王国」とも呼ばれるここ信州では、縄文時代の遺構・遺物が数多く発見され資料が蓄積されている。

昨今、各地で行われている著名な縄文時代遺跡を資源とした地域活性化事業の盛り上がり方を見ると、「JOMON」ブームに対する市民の関心の高さがうかがえる。

しかし、こうしたブームは、自然と日々接して行われている発掘調査で、地下から発見される遺構や遺物といった縄文人が残した生の痕跡がベースになっていることを忘れてはいけないと、本号を編集しながら改めて感じられた。（河西 克造、上田 真）



本号で掲載した遺跡位置

(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4
TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157
http://naganomaibun.or.jp/ 印刷：奥山印刷工業株式会社

この冊子は、平成31年度 地域の特色ある埋蔵文化財活用事業で作成しました。